

道理の感覚

最近天野貞祐著「道理の感覚」を購入して読みました。

その中に良い言葉がありました。「一国民の偉大さとは、領土の大きさではない。財貨の豊富さではない。一国民が実証し能う道徳力こそまさにその国民の偉大さなのである。古今の歴史を見ると、廃れた国はすべて道義が退廃した為である」と言っている。

我が国は国土を失い、人口が減り、財力が乏しくなっても、道徳を堅持することが、今後世界の中で生きてゆく道だと思う。

国土を広げ、財力を蓄え、武力で他国を威嚇する国があっても道徳が無ければ、やがてそのような国は世界からつまはじきされる国になる。日露戦争後の日本がそうであった。日露戦争に勝って、世界の事もしらず、天狗になって、軍部が独走した為に、第二次世界大戦を経て、先人がきづいた日本国はみじめになってしまった。道理という言葉は日常広く用いられており、道理で今日は暑いはずだ、これは道理に叶う、それは道理に合う等使われている。一口で言えば「すべての人が人間に従わねばならない一般的秩序」と天野先生は言われている。碎いていえば、道徳よりもひとつ前の、人間としての道をいう。数学で言えば公理みたいな事であろう。秋葉原駅前の無差別殺人事件、吉祥寺のストーカーによる殺人事件、ウクライナ上空に放ったマレーシア民間航空機撃墜事件。最近では佐世保の女子高生による同級生への絞殺 首切り事件。あげればきりが無い、これは世界中が病んでいる証拠である。親が子を殺し、子が親を殺すような事は犬、猫でもやらないであろう。すべて経済に関係している。金のない者は、人を殺してでも、金を取ろうとする。これが世界的に常態化しているのである。道徳には個人道徳と公衆道徳の二つがあると思う。電車に乗ったら、老人に席を譲りましょうが個人道徳で、マレーシア民間航空機撃墜事件は公衆道徳ではなかろうか。

昔の日本は貧乏であったが、人を殺してまでして、金を取ろうとする人はいなかった。裁判が甘いからではないかとも思っている。

外国人は昔日本に来て、日本人は清潔で、礼儀正しく、親切であると言っていた。人生の先立者は今一度道徳をわきまえ、後から来る人々に模範を示して行くのではないか。

この本は岩波から出版されていて、決して哲学の本ではなく、紀行文みたいな内容であり、netでも中古本が買えますから、一読を薦めます。

天野貞祐：旧制第一高等学校卒業、京都大学哲学科卒業、旧制第七高等学校教授、京都大学哲学科教授、カント哲学者、第一高等学校校長、終戦後吉田茂首相の請われて文部大臣、独協学園園長・独協大学学長の経歴があり、第一次大戦後のドイツの惨状を知り、太平洋戦争、その戦後を潜り抜けて来た人で、我々と似たような世界に生きて経験をしてきた人です

緒方 博丸：独協医科大学名誉教授

平成26年8月1日